

I - C - 11

抗がん剤の副作用軽減に対する 漢方方剤の臨床効果

三重大学医学部整形外科¹⁾、鈴鹿中央総合病院整形外科²⁾

○日沖甚生¹⁾、稲田均¹⁾、園田潤¹⁾、大萱稔²⁾

【目的】抗がん剤投与による副作用は消化器症状や腎機能障害、骨髄抑制などがあり、しばしばその対策に難渋する。また、hydrationを行なうため、水毒による多彩な症状も多く生じる。こうした副作用対策に漢方製剤を用いその効果について検討したので文献的知見を加え報告する。

【対象と方法】抗がん剤を用いた化学療法が施行された悪性骨軟部腫瘍患者7例を対象とした。十全大補湯は4例で骨髄抑制防止、気虚による食思不振などを使用目標とし投与された。柴苓湯は2例で腎毒性軽減目的で投与された。補中益気湯は2例で腫瘍免疫向上と水毒による消化器症状を使用目的とした。大建中湯はオンコビンによる麻痺性イレウスが生じた1例に対し使用された。半夏白朮天麻湯は頭重感、胃内停水、身体動揺感が生じた1例に対し使用された。方剤はいずれもツムラ医療用エキス顆粒を使用した。上記症例に対し、血液検査所見、自覚症状、他覚的症状をもとに個々の方剤の効果を検討した。

【結果】十全大補湯の4例では、骨髄抑制の改善が認められた例はなかったが、食思不振が軽減されたのが2例であった。柴苓湯の2例に関して、MTXによる腎障害が生じた例では、次回からのシスプラチンを中心としたコースで尿量確保が可能となり、またBUN、Creaなどの指標の改善も認められた。ネフローゼ症候群の既往があった例ではIFOS、カルボプラチンを使用し、化学療法による腎障害は認められなかったが、治療前より持続する蛋白尿は変化が認められなかった。オンコビン(1.4mg/㎡/日)を使用し麻痺性イレウスを生じた例で大建中湯を2週投与したが著変は認められなかった。補中益気湯の2例では化学療法後食欲低下が軽度になった1例と、しゃっくり、胃内停水などの水毒症状の緩和が得られた1例であった。半夏白朮天麻湯の1例は投与後3日で症状すべての軽快が認められた。

【考察】抗がん剤の治療は副作用を生じる場合が多く、また症状が多彩でそのために西洋薬が重複して投与されることがあり、患者の精神的負担も大きい。漢方薬は多彩な症状を1剤でカバー出来る薬剤であり、患者自身も漢方薬なら進んで服用するケースも見受けられる。治療後も持続的に投与することで、補中益気湯や十全大補湯は腫瘍免疫学的にも効果があると考えられており、われわれは積極的に使用している。